

【道具と共に人がつくられる】

剣道では稽古・試合に用いる着衣や用具も重要な意味をもつものであり、道を修める伴侶とす
ら位置づけたいものです。それらには、伝統的な教えの数々が込められていることも理解を深め
させなければなりません。

はかま
袴の五つの折り目や竹刀の五節は、中国の五行説に源を発していると伝えられています。

五倫とは、父子の親・君臣の義・夫婦の別・長幼の序・朋友の信を意味し、五常は人間の行う
べき五つの道、すなわち仁・義・礼・知・信を教えており、五教とは君子が人を教える五つの方
法（雨がものを育てるように教える・徳性に応じて教える・才能の長所によって教える・問いに
答えて疑惑を解いてやる・間接に君子の感化をうけて自分をよくするようにさせる）といわれま
す。日常の稽古で必ず用いるものに修養のねらいが宿しているのだからこそ、用具ではなく道具
と称するのであり、青年期には特に道具に対する認識を深めさせ誇りを植えつけたいものです。
袴に足を通す時、竹刀袋から取り出した竹刀に鐙つばを装着する時々に認識と誇りを反復すること
によって気構えをつくり、やがて人格を築くことになります。だからこそ伴侶としての道具を丁
寧に取り扱い、同時に自分の道具だけではなく同行の他者の道具についても、その人の人格を尊
重するのと同等に配慮できるように導かねばなりません。

面・小手・胸・垂など、身を保護する道具についても、同様の心配りを育てたいものです。すなわち、各所の紐ひもの結び目の点検や形状の確保、あるいは乾燥具合の点検に始まり、使用後の汗や汚れの拭き取り・破損の有無の点検・収納の仕方に至るまで愛着をもって道具を取り扱う態度の形成は、まさしく人格形成への手がかりといえます。

稽古や試合の直前に面紐が切れたり、小手の紐が垂れ下がったまま装着しているようでは、修練の浅さを見破られ、その時点で後れをとってしまいます。道具の取り扱いと管理に注意を払っている人は、おのずからその装着も整い、立ち姿に気品を漂わすこととなり、技量以前の備えを感じさせ、修練への気構えを示して美を感じさせるものです（実は、稽古に向いた先で手拭いてぬぐを忘れた体験のある私は、その反省から稽古後に面を干す際には、必ず乾いた手拭いを面紐にはさんでおくようにしています）。

ここで注意しなければならないことを掲げておきます。

○道具を整え、注意深く取り扱って着装を美しくするということを誤解してはならない

いたずらに高価な新しいものにこだわり、大事な稽古を怠って、見栄えばかり気にしているようでは、本末転倒です。かといって、道具は使いっぱなしで腕前さえ強ければよいではないかといつて、無頓着なものいけません。よほど修練を積み上げて肚はらの据すわった熟達の士ならばいざ知

らず、凡人の多くは身繕みつくろいが不十分であると氣構えも崩れやすくなるものです。

あくまでも分相応の品を十分手入れして、愛着心を自負心に育てあげ、身を正して事に臨む態度を形成することが大切です。学校などから支給された道具であっても、自ら買い求めたものと同様に愛着をもつて使用する態度は、やがて公德心の芽となつて社会性を育むことにつながります。

○肩掛けやキャスターなどが剣道具収納に普及しているが、愛着心の育成や修行的態度形成を阻害している

身体機能の問題で自分の道具も担げないような人が稽古をしている例は、ほとんど稀まれにしか見当たりません。肩掛けやキャスター付きの剣道収納具が近年普及してきていますが、便利だからといって道路を引きずつて運んだり、竹刀まで宅配便で送つてしまうのは、修行者の態度としてはいかがなものでしょうか。特に青年期には門を一步出た時からが修行であり、伴侶である道具は何よりも自身で持つて運ぶくらいの心がけは大切な修練の内容ではないでしょうか。

文明が人間をひ弱にしてしまう例は他にも多くありますが、他の運動文化以上に道具と共に旅して修行するという態度こそ剣道人の誇りとせねばなりません。不便さや不足が青年に忍耐力を育て、やがて逞しく誇らしい身と心で弱者を思いやるほどに成長してほしいものです。老齡の大

先生も青年剣士も同様に、キャスター付き道具袋では鍛錬期のあり方として容認できません。

私が大学を卒業して間もない五月に、初めて高校生を対外試合に引率した時のことです。三年生で占める正選手が下級生に道具一切を持たせて、大会場に悠然と現れたのを知った私は、試合の受付場所に直行しました。そして「〇〇高校 A チームは欠場です。B チームのみ試合させていただきます」と告げて、主将をはじめ A チームの三年生に応援席に行くよう命じました。

B チームの試合が終わるや直ちに帰校して道場に入り、私が元に立って徹底的に三年生全員に打ち込み稽古を課しました。昨今のように自家用車での移動ではありませんので、帰路の乗り合いバスの中の不気味な沈黙は今でも覚えています。罰として打ち込みを課したのですから、けっして良い指導方法とはいえませんが、その日を境に三年生の稽古態度は一変して、その年は良い戦績を残したことが思い出されます。

青年期は鍛錬の適期であり、剣道に込められた修養的（教育的）特性を身をもって十分に体験させることは、将来への確かな礎いしずえを築くことになるのです。技術の上達より以上に精神的陶冶に資する剣道の内容を具体的に示し、自問自答させることが、重要な剣道教育の今日的課題と考えられます。稽古場や道具によって学び得たことが、やがて社会人としてさまざまな業種・職域において、それぞれの業績を向上させたり人柄を評価されることにも発展するのです。その意味において、道場や道具は、貴重な教育の機会を与えていることに注目したいものです。